連載　第113回

私のはんせい記

～「改修設計」事始め～

建築家　三木　哲

イスタンブールのブルーモスクの巨大で完成度の高い内部空間

紀元前11世紀頃イオニア人が建設した港湾都市国家エーゲ海に面するエフェソスの遺跡

●トルコの旅

大久保の周辺に数件のトルコ料理店がある。

トルコ人の店長や料理人は陽気で勤勉で親しみやすく、トルコ料理は美味しいので、よく食べに行く。

当初トルコ人の印象は、アジア人ではないが、西欧人でもなく、良くわからない存在だった。

2005年、トルコで世界建築家大会が開催され、次のUIA大会は東京で開催が予定されていたので、東京への招致を目的にイスタンブールに出掛けた。

JASO会員と共に、トルコ１周ツアーに参加した。

イスタンブールは、かってコンスタンチノープルと呼ばれ、東ローマ帝国の首都だった。

1453年小アジアのアナトリア地方北西部より勃興したオスマントルコ帝国によって征服された。

オスマン帝国のメフメト２世は、征服後、ただちにハギア・ソフィア大聖堂をはじめ多くの教会をモスクに改修するとともに、1457年以降この町を帝国の首都としてその名をイスタンブールと改めた。

歴史に残るオスマン帝国の最大領土は、北はハンガリー、西はアフリカのアルジェリア、南はエジプト・イエメン、東はアジアのインドに至るなど、実に広大だった。

イスタンブールは西洋と東洋の境界に位置し、ボスボラス海峡の西側がヨーロッパ、東が東洋である。

イスタンブールの街を案内してくれたトルコ人のバスガイドさんに率直に「貴方は、自分をヨーロッパ人と思うか？　アジア人と思うか？」と尋ねた。

「自分はトルコ人だ」と答えた。当時トルコ政府は、EUに加盟しようとしていたが、EUはトルコを異端視し、「対等に扱ってくれない」とある種、ヨーロッパに対しコンプレックスを感じている印象だった。

ツアーは、イスタンブールからカッパドキアを経てエーゲ海に出てイズミール、パムッカレ、エフェソスを経てトルコを一周するバスの旅である。

この旅でエフェソス遺跡が最も強く印象に残った。

トルコ西部のエーゲ海沿岸に、紀元前11世紀頃イオニア人が建設した港湾都市国家である。

エフェソスは小アジア内陸などとの貿易により大いに発展した。

遺跡はコレッソス山を背にし、ピオン丘を中心に東西1.5㎞、南北1.2㎞の規模を持ち、西の端に船着き場の施設がある。またエフェソスの北東２㎞にアルテミスの大神殿の跡が建っていた。

エフェソスの中央の通りに１㎞ほどイオニア式の列柱が並び、その左右に円形劇場や建築が並ぶ。

イオニヤ様式はギリシャ建築にあって最もエレガントな表現に富み、トルコの地にあるが、ギリシャ建築の世界遺産群である。

カッパドキアはトルコの中央アナトリアに位置し、岩石をくりぬき地中深くまで居住する地中都市だ。バスツアーでは地中の洞窟のようなレストランで食事をし、地中のホテルで就寝する体験をした。

さらに熱気球に乗り空から地中都市カッパドキアの全景を眺めまわす体験もした。

イスタンブールの西側はかって東ローマ帝国の首都コンスタンチノーブルと呼ばれ、その後オスマントルコの首都となった都市でトプカップ宮殿や数々のモスクや歴史的建築遺産が多い。

取分け巨大でドーミカルな内部空間を持つブルーモスクはすばらしい建築である。

アヤソフィア大聖堂は、キリスト教の聖堂として建てられ、オスマン帝国時代にミナレットが加えられイスラムモスクに姿を変えた。

内部には聖母子のモザイク画やアラビヤ語で書かれた歴代カリフの名前などが見られる。

1616年に建てられたスルタン・アメフト・ジャーミーは、ブルーモスクと言われ巨大ドームを戴く礼拝堂があり完成度が高い内部空間を持つ。２万枚以上もの青いタイルが貼られ、約260枚のステンドグラスの小窓から差し込む光がそのタイルを照らし内部空間を豊かな色彩の世界としている。

私はこのブルーモスクの建築の内部空間の質は、世界で最も優れたものだと思う。

みき・てつ
㈲共同設計・五月社一級建築士事務所顧問。1943年生まれ。
URD・建築再生総合設計協同組合・管理建築士。
建築家がメンテナンスを手がけることなど考えられなかった時代から「改修」に携わり、40年以上にわたって同分野を開拓し続けてきたパイオニア。